

中国少数民族の昔話

——白族民間故事伝説集——

李 星 華編著
君 島 久 子訳



第11卷

世界民間文芸叢書

中国少数民族の昔話

——白族民間故事伝説集——

李 星 華編著
瀧 島 久 子訳



第11卷
世界民間文芸叢書

訳者略歴

君島久子（きみしまひさこ）

栃木県生まれ。

慶応大学・東京都立大学大学院卒業。

現在、国立民族学博物館教授。

主著 『白いりゅう黒いりゅう』（岩波書店）サンケイ児童出版文化賞受賞、『西遊記』（上・下）（福音館書店）日本翻訳文化賞受賞、『チベットのものいう鳥』（岩波書店）、『東洋童話集』（講談社）、『中国・東南アジア民話集』（偕成社）他多数。

論文 「中国の羽衣説話」、「洞庭湖の浦島説話」、「金沙江の竹娘説話」、「龍神龍子説話と龍舟祭」。

中国少数民族の昔話

——白族民間故事伝説集——

世界民間文芸叢書

昭和55年11月15日 初版第1刷発行

第12回配本

昭和56年6月30日 第2刷発行

定価 1600円

編著者
訳者
発行者
印刷所

李星華
君島久子
吉田栄治
大文社印刷

発行所

三 弥 井 書 店

〒108 東京都港区三田 3-2-6

電話 03-452-8069 振替東京 9-21125

はじめに

本書は中国少数民族の民話集の中でも、特にすぐれた代表的なものである。

著者、李星華女史は、現代中国の創業期に偉大な足跡をのこした李大釗を父君にもち、動乱の歴史の中に数奇な運命をたどりつつも、少数民族の民話の採集と研究に尽力した。とりわけ本書「白族民間故事伝説集」は、著者が、単身雲南省の奥地の大理に住む白族の中にわけ入り、白族の人々と寝食を共にして、その地に伝わる伝統的な民話・伝説を採集し、更にその採集した時の情況を、たんねんに記録している。こういうものは、他に類例がない。私たちが、容易に入り込めない地域だけに、その記載は極めて貴重である。

だが悲しいことに、私が著者に、この訳書のための序文を依頼する手紙を差し上げた日に、著者李星華女史は、黄泉の客となってしまわれたのである。

この計報を女史の夫君、賈芝教授（中国民間文芸研究会の代表者）より頂いたとき、あまりの驚きと悲しみに茫然自失、しばらくは筆をとることも出来なかった。女史の書いて下さるはずの序文は、賈先生の手によって代筆されていた。私はあふれる涙をこらえながら、終りまで読みすすめたとき、末尾に記された日付をみて、更に深い感動におそわれた。賈先生の生涯の伴侶であり同志であった李星華女史が、永遠の眠りについた直後、その涙もかわく暇もなく、先生は序文の筆をとって

下さったのである。ここで訳者が多くを語るよりも、先ずその感涙あふる序文をお読み頂きたい。

今は亡き李星華女史の霊前に、謹んでこの書を捧げ、心こめてその御霊の永遠に安からんことを祈りつつ――。

君島久子

序

君島久子先生の書簡を拝受したのは、李星華同志が不幸にして此の世を去った直後であった。十一月二十七日午後三時二十五分、北風呼嘯として、氷の大地を封ずる時、彼女のけなげな胸の鼓動は、須臾の間に動きを止め、ここに彼女と我々とは永遠に別れを告げたのである。

星華は一九一一年、渤海の浜楽亭県大黒坨村に生まれた。彼女の父、李大釗は中国共産党創立者の一人で傑出した人物であった。一九二七年四月六日、彼女は父親とともに逮捕され、二十八日、李大釗同志は軍閥政府のもとで絞首刑に処せられたが、その時星華はわずか十六歳であった。反動派のこの残酷な行為は、彼女の幼い心に革命の炎を燃やすことになったのである。

父の亡きあと、兄の李葆華は日本に亡命し、家庭生活の負担はすべて彼女の双肩にかかってきた。彼女は病床に伏している母親の世話をするかたわら、北京にいる弟妹の面倒を見、学校へ連れて行き、更にみずからも働きながら学ぶ勤労学生として大学を卒業した。

その時彼女は、すでに父の遺志をついで革命に身を投じており、年若い戦友達と秘密工作に従事していた。

一九三九年、彼女は商人の家族になりすまし、千辛万苦を重ね、幾重もの封鎖網を突破し、革命の聖地延安へと走り、抗戦と解放戦争に参加しつつ、全国解放の夜明けを迎えたのである。

星華は長期間にわたって、教育と民間文学の仕事にたずさわっていた。彼女は「桃李天下に満つ」⁽¹⁾良き教師であった。一九五六年から中国民間文芸研究会の仕事に参加し、民間故事編集の責任者であった。

彼女は民間故事を採録する際、「忠実に記録する」という原則を堅持すべきであるとして、自らもそれを実行した。彼女は博識で、また物語を話す話術にもたけており、素朴な口調で諄々として語りかける話は聞くものの心に深い感動を与え、おのずと物語の世界にひき入れてしまうのだった。このため、働く人々のすぐれた口承文芸が、彼女の筆のもとに、いきいきと再現されるのである。

一九五六年、星華は中国科学院文学研究所⁽²⁾と民間文芸研究会が合同で組織した民間伝承の雲南調査採録隊に参加し、大理にもむいて調査を行った。他の調査員たちは、高寒山区に行く者と、麗江の兩岸に行く者と共に班を分ったが、彼女は単身洱源に留まり、辛苦をものともせず村々を訪ねまわり、その地に伝わる貴重な民間故事をつぎつぎと採録して歩いた。この「白族民間故事伝説集」こそ、当時の血と汗の結晶なのである。

「四人組」が横行していた際、星華は残酷な迫害と精神的弾圧を受け、それがもとで、双方の眼が失明するという悲劇に見舞われた。「四人組」が粉砕されてのち、彼女は勇気をふるいおこし、病いの身で長らく中断していた「回憶我が父李大剣」のつづきを執筆しようと思いついた。だがこの時すでに彼女は、自ら筆をとることはできず、ただ口述して娘に筆記してもらうはかなかった。彼女は篤き病の床にあって、父の回想のすべてを書き上げることは出来ないかもしれないと、しば

しば遺憾の念をもらしていた。彼女はこのような心情をいだいたまま、惜しくもこの世を辞したのであった。

君島久子先生はすでに六十年代に「白いりゅう黒いりゅう⁽³⁾」を翻訳されており、今回「白族民間故事伝説集」を日本の読者のために訳出されることは、日本の人々が我国白族の美しい故事伝説を読むことができるだけでなく、中日両国人民の友好の往来と文化の交流に対しても極めて貴重な貢献であると深く信じている。

今年十月、星華の病状が急に悪化した際、藤山愛一郎訪中代表団の医師田口先生が、日本の友人の依頼を受け、わざわざ病院まで星華を見舞って下さった。その後まもなく荒隆一、西堀文男の両先生と、技術専門家の増田幸一郎氏が、北京へかけつけられ、星華を救うため専心医療にたずさわって下さった。そのために、数日にして彼女の病状は急速に好転したのである。諸先生のすぐれた医療、特に患者に対する手厚い治療と献身的な精神は、まことに忘れ難き感銘をあたえずにはおかない。諸氏は、中日人民の友好的情誼に新たな光彩を加えたにとどまらず、日本における高度の技術を中国医学界に伝授された。私はここに衷心より欽佩と敬意を表示するものである。

星華は、私と艱難をともにした伴侶であり、戦友であった。私が彼女の逝去で悲歎の涙にくれているさなかに、時も折り、その時刻に、君島久子先生より星華に序文を書いてほしい旨、書状がとどいたのである。

しかし悲しき哉、彼女はもはや桜花の国の親友の期待に、二度と答えることができなかった。私

が星華にかわって、この短い序文を書き、日本の読者に彼女を紹介するとともに、中日両国人民が世々代々の永きにわたり、友好のきずなで結ばれんことを衷心より念願するものである。

一九七九年十一月三十日払暁

賈 芝

註(1) 門下生が多勢いるすぐれた教師。

(2) 現在は中国社会科学院文学研究所。

(3) 賈芝・孫劍冰・君島久子訳「白いりゆう黒いりゆう」岩波書店一九六四年初版(昭和四十年サングェイ児童出版文化賞受賞)。

目

次

はじめに	君島久子	i
序	賈芝	iii

I

天地開闢	4
蕁麻と艾蒿	12
けものたちの言葉	21
長生の宝物	34
鵝卵石	48
金龍の仇討ち	55
龍王の娘	59
ねずみの来歴	68
宝の壺	70
身から出たさび	84
賢い女房	88

II

目 次

海東の娘……………100

白蛇のすけだち……………105

龍王の子供……………109

白王の死……………118

羅 利……………123

III

王女と炭焼き……………134

蝴蝶の泉……………143

蛇骨塔……………152

望夫雲(一)……………157

望夫雲(二)……………163

火把祭……………166

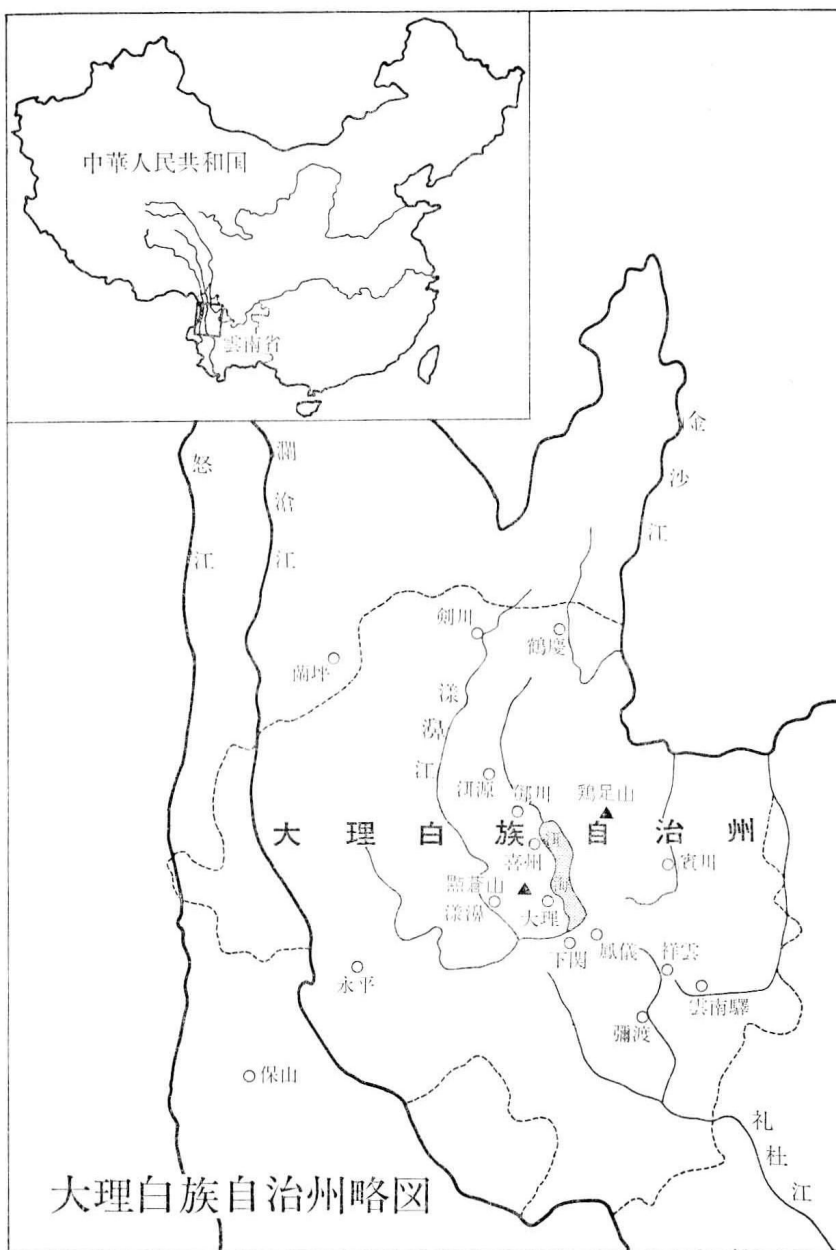
IV

苳菰湖の伝説……………174

一、苳菰湖の物語……………174

二、此蒼湖 ^{アサギ} の金の豚の由来	176
三、漁師の老夫婦が金の豚をつかまえた話	177
浪穹 ^{ラングワン} 竜王の伝説	179
一、おろち退治の英雄	179
二、浪穹 ^{ラングワン} の龍王と爛板橋 ^{ランバンキョウ} の悪龍王	184
三、一粒の茶心豆	187
四、龍王と陶進士 ^{タウシン} の交遊	190
五、龍王本性を現わす	192
虎になった段燈 ^{トウシユ}	195
舍利の花の樹	205
小黃龍	210
白族の民間故事伝説について	220
白族の風俗と歴史的背景	248
原語対訳	302
あとがき	303
李星華	
毛星	
新島翠	
君島久子	

中国少数民族の昔話——白族民間故事伝説集——



I

天地開闢

大昔盤古バンクウと盤生バンシヨウという兄弟がいた。二人は毎日柴刈りに行き、刈りとった柴を町で売って暮らしていた。

ある日のこと、盤古バンクウは町で廟中王ミヤオチユンワウ（親音の父親）という易者先生に出会ったので、運勢を占ってもらふことにした。

「おまえの運勢からみると、柴刈りよりも魚をとったほうがよいな」

と廟中王ミヤオチユンワウがいうので、

「私も魚つりは好きですが、どこへつりに行けばいいのか、いつ頃行けばよいのかがわかりません」と盤古バンクウが答えると、

「では、金沙江サシヤチャンのほとりへ、八月三日太陽の出る頃行くがよい」

廟中王ミヤオチユンワウはこういつてから、念をおすように、

「つりはじめたら、一匹めのえものに用はない。二匹めもいらぬ。もっぱら赤い魚だけを選んでつかまえるのじゃ」

盤古バンクウはかさねて、

「つかまえて帰ったら、それを煮て食べてもいいのですか」